

科学技術を生かして、 地球規模の課題を解決したい

日本の強みである科学技術を生かした研究プロジェクトの採択や運営をサポートするJICAの国際科学技術協力室。小峰雪代さんは、開発途上国と日本の研究者が円滑に共同研究を進められるよう制度づくりに取り組む。

世界の食料問題に 向き合う

日本では食べ物が余っているのに、開発途上国では飢えている人がいる。高校生のように世界の食料問題について学び、なぜこのような違いがあるのか疑問に思いました。そこでまずは、食べ物がどこで作られ、どのように流通しているのかを知りたいと、大学では農業経済学を専攻。バングラデシュ、タイ、ベトナム、ケニアなどをフィールドに、それぞれの国で栽培されている作物の種類、農業組合の役割、流通の仕組みなどをテーマに研究しました。

また、途上国の青年たちを日本に招いて交流を深めるJICA青年研修事業に参加する機会があり、アフリカや東南アジアの青年たちと出会いました。互いの国の文化を紹介したり、農業について語り合ったり。彼らと触れ合ううちに、彼らの母国が抱える農業の問題解決に貢献したいと思ひ、それが実現できる就職先として選んだのがJICAでした。早速、1年目には農業開発部に配属され、フィリピンで農作物の安全性と生産性を向上させるプロジェクトなどに携わりました。

現地に根づく 支援の在り方を学ぶ

その後、国際協力を縁の下から支える調達部に異動。いわゆる「国際協力」のイメージとは違うかもしれませんが、途上国で事業を進める上で必要な機材や物資を現場に届けるという大切な仕事です。例えば、マラリアを防ぐための蚊帳、職業訓練に必要なパソコンなどがなければ、現場の支援は進みません。そして、この時に学び、現在の仕事でも生きているのが、現地に根づく支援という視点。プロジェクト側から、ある機材が欲しいと要請が来ても、それが現地の人々にとって使いやすいか、役に立つ機材でなければ意味がありません。どの機材であれば現地の人々が自分たちで維持管理しながら持続的に使えるか、彼らへのヒアリングなどを通じて綿密に調査していました。

現場の研究が効率的に 進むような支援を

現在は、経済基盤開発部で地球規模課題対応国際科学技術協力（SATREPS）業務を主に担当しています。日本と途上国の大学や研究機関が行う研究を、SATREPSを通じてどう支援できる

か、独立行政法人科学技術振興機構と協働で検討しています。JICAとしては、その研究が途上国の課題の解決や研究レベルの向上につながる。現地に根づく支援であるかに着目しています。また、両国の研究者がスムーズに共同研究を進められるよう、研究に必要な機材調達や予算の使い方をアドバイスするなど、後方からサポートしています。最先端の科学技術を有する先生方と地球規模課題の解決に取り組むことができ、とてもやりがいを感じられる仕事です。

SATREPSはJICAにとっても新しい国際協力のアプローチです。日本の強みである科学技術を使った共同研究に取り組むことで、日本と途上国が共に学び、共に成長していく。その成果を少しでも広めるため、サポートを続けていきます。



農業開発部時代、フィリピンの試験場を視察する小峰さん(左端)



経済基盤開発部
国際科学技術協力室

小峰 雪代
KOMINE Yukiyo

大学卒業後、1998年にJICAに就職。農業開発部(当時)、調達部を経て、2011年12月から現職。

写真=久野真一(下写真を除く)



JICAフィリピン事務所とのテレビ会議で、SATREPSの感染症対策プロジェクトに参加する大学の教授らと話し合う小峰さん(右奥)